

ピアノの発表会

里庄町立里庄東小学校

六年生 藤井美緒

私は、小学二年生からピアノを習っている。お母さんが子どもに使うに使っていたピアノを、おじいちゃんの家から運んできて、我が家のリビングに置いてある。少し古いけど、とてもきれいな音が出る、すてきなピアノだ。お母さんは、幼稚園入園から高校卒業まで、ピアノを習っていたらしい。今でもときどき、家でピアノを弾いている。

十月にピアノの発表会があった。本当は四月の予定だったが、コロナウイルス感染拡大の影きょうで、十月に延期になった。私の通っているピアノ教室の発表会では、一人で弾く曲とは別に、連弾曲も演奏する。連弾は、先生と一緒に弾いたり、姉妹や友達と一緒に弾いたりするが、私は毎回、お母さんと一緒に弾いている。私がお母さんと弾きたいというよりは、お母さん

が私と弾きたいから、いつも連弾の相手になっている。でも、私はお母さんと一緒にピアノが弾けるのがうれしい。発表会でお母さんと連弾をすることは、特別なことのように思え、ほこらしくもある。

実は、今回の発表会の選曲をする前から、私はお母さんと連弾したいと考えていた曲があった。それは、中島みゆきさんの「糸」という曲だ。時々、家でお母さんがピアノで弾いている曲である。お母さんが弾くメロディーは、とってもきれいで心地良い。

そして、この「糸」は、お父さんが好きだった曲の一つである。

私のお父さんは、七年前に病気で亡くなった。私は知らないが、お父さんは歌を歌うのがとても上手で、「糸」はお父さんとお母さんの思い出の曲の一つでもあるらしい。お母さんに「糸」の歌詞を教えてもらい、初めて歌詞の意味を知ったときは、

「こんな曲だったんだ。」

とおどろいた。私には全部の理解は難しかったけど、お父さんが好きだったというのがわかったような気がして、私はもっとこの曲が好きになった。

だから、私はいつか、私のピアノが上達したら、お母さんと一緒に連弾で、「糸」を弾いてみたかったのである。今年の発表会の選曲は、迷うことなくすぐに決まった。お母さんは、うれしそうに喜んでくれた。

先生に「糸」の楽譜をもらい、早速練習が始まった。メロディーは知っていたつもりだったのに、実際楽譜を見て弾いてみると、思うように弾けない。今までの楽譜と違ってお母さんも少し苦戦していた。先生は優しいが、お母さんは厳しかった。でも、練習は楽しかった。お母さんと合わせて、少しずつ一緒に弾けるようになっていくのがうれしかった。

発表会の日、大きなホールの舞台上で、ピカピカのピアノを弾いた。感染対策として、発表する演奏者とその家族だけが、時間ごとに順番に入場し発表会を行う形式だったので、何百席もある観客席には、お兄ちゃんと弟、おばあちゃんだけが座っていた。でも、姿は見えなくても、絶対お父さんも会場にいたと思った。発表会を見に来ていると感じた。

いよいよ、お母さんとの連弾の時間になった。知らない人はいないのに、なぜか緊張する。お母さんは、私よりもっと緊張していた。

「いつも通りに弾こうな。」

とお母さんと声をかけ合い、舞台上上がった。

順調に演奏は進んでいったが、途中でお母さんが間違えた。練習では問題なくできていたところで間違えた。でも、お母さんは止まらず、ちよつとごまかしながら弾き続けた。私までドキドキしたけど、心の中で、

「さすがお母さんじゃなあ。」

と思った。ピンチを乗り越えた後は、最後まで練習通りに、気持ちこめて弾くことができた。お母さんとの息はピッタリだった。

舞台から降りたとき、お母さんが、

「さすが美緒じゃなあ。」

と笑った。私も笑った。完ぺきに弾けなくて残念だったけど、お母さんと一緒に「糸」が弾けて良かったと、心の底から思えた。

私一人で弾く曲も演奏し終わって帰るとき、

「お父さん、最後まで聴いてくれたかな。」

と、もう一度ホールを見渡して会場を出た。

発表会から二か月がたった今も、ときどきお母さんと一緒に「糸」を弾いている。今はもう、完ぺきに間違えずに弾ける。お母さんは、

「発表会のあのときに戻って弾き直したい。」

と、今でも言っている。本番で間違えたことが悔しかったんだろうなと思うが、それよりも、お父さんに完べきな「糸」を聴かせてあげたかったのかなとも思う。でも、多分お父さんは、こんな日常の練習風景も、どこかで見たり聴いたりしているはずだ。楽しくピアノを弾いていれば、どんな曲でも演奏でも、きっと喜んでくれると思う。

これからも、いろんな曲を弾いてみたい。そして、発表会での連弾曲は、お母さんと一緒に演奏し続けていきたい。